

## 新撰字鏡「本草部」の記載形式とその構成

福田, 益和

<https://doi.org/10.15017/12273>

---

出版情報 : 語文研究. 18, pp.34-47, 1964-08-31. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :



# 新撰字鏡「本草部」の記載形式とその構成

福田益和

昌泰年間(898~901)に昌住によって撰述された辞書「新撰字鏡」については、従来、やゝともすれば、その研究が等閑視されがちであつた感がある。自分は、つれづれなる宵居などに朱表紙の天治本新撰字鏡(大槻文彦博士によって複製刊行されたもの)を眺めながら、紙面に並ぶ漢字の群れ、和訓に魅せられて、本稿を思い立つたものである。

さて、標題にかゝげた「本草部」について、先ず一言しておきたい。

本辞書は、周知の如く、漢字を偏傍によつて分類し、百六十の部首を立てることによつて、そのいづれかに漢字を収め配列してあるが、部首についても、意味による分類が加味されているようである。しかし、巻末の「臨時雜要字」の項は、部首分類とは、いさゝか趣きをことにし、又「小学篇字及本草木異名<sup>第六十九</sup>」、「小学篇字及本草々異名<sup>第七十</sup>」「本草鳥名」(天治本卷八、12ウ)等とある

項も、偏傍による分類とは言えないであらう。(これ等は、木部、草部、鳥部の各部首の次又は一部に次第されているところから、明らかに、字形というより、意義を加味した分類と言ふべきである。) こうした特殊な項目となる本草関係の部(「本草鳥名」のみは、「鳥部」の一部に添加されていて、独立の部首をなしていない。)をこゝでは特に「本草部」と呼称して、初めにかゝげたわけである。

「本草部」は、右の如く、その篇立次第が特殊であるだけでなく、各標字の記載形式及び配列も又特殊なものとなつている事は、当然推察されるので、本稿ではこの点に注意をしばつて考察して見たい。

## 二

「新撰字鏡」は、漢和辞書であるから、標出された漢字について、発音・意義・和訓を注するのが普通であるが(但し、本辞書に和訓が全部附してあるわけではない。)(「本草部」においては、例

えは、

酸漿 五月採實陰干安心益氣

加我弥吾佐又云奴加豆支卷七、36ウ天治本、以下同じ

の如く、初めに所謂「採藥時節」「性味」を掲げ、次に和訓を附す記載形式をとっている。では、本草關係の辞書としてすぐ頭に浮かんで来る「本草和名」(深根輔仁著)においてはどうかであらうか。右と対応するものを掲げると、

酸漿 一名酢漿一名酢菜(中略)一名苦蕒一名苦蕒子一名王母

珠(中略)一名酸芳草、和名保々都岐一名奴加都岐。

(上、31ウ、日本古典全集本、以下同じ)

となっている。右の例よりわかる如く、「本草和名」は、漢字の標字の記載に中心をおいて(右の例では、「一名」を十一例もあげている。)最後に「和名」を加えることで終っている。「新撰字鏡」のように、「採藥時節」「性味」等については、少しも關心をもたないのである。「本草学」としての書、つまり本草家の為の専門書としては、薬種の標字や和名を知ることと大切なことであろうが、その薬の「採藥時節」、「性味」の知識を得ることは、より以上に必須なことと考えられる。よって、本草家にとっては、「本草和名」の如き書は、本草の辞書ではあっても、それは、文字通りの本草の用語の辞書たるにすぎなく、もっと具体的な実用上の書物としては、あまり役に立たないものであったと考えられる。そこで、本草家としては、自己の要求を充たしてくるものとして当然、他の書を求める必要があつたであらう。

こう見て来ると、新撰字鏡の本草部における記載形式は、不充分

ではあるが、右の要求を充たすべき体裁を保っている点注意すべきである。では、新撰字鏡と同様な記載形式をもっている書が他にないものであろうか。ここで、我々は、「康頼本草」のあつたことを当然想起するはずである。前記「新撰字鏡」、「本草和名」二例に対応するものを、「康頼本草」より抽出してかゝげると次のようになる。

酸漿 味酸平寒无毒、和保字川支、五月採陰干、陶隱居云、山

茨菰號之。(詳書類從本<sup>430</sup>上12。以下同じ)

和訓、注文について、新撰字鏡と多少の異同は見られるが、いづれも「採藥時節」、「性味」、「和訓」をかゝげている点、共通しているところがある。

これより考えると、新撰字鏡・康頼本草二書の典拠とした本草書においては、当然、同様の記載形式があつて、(それも、もっと詳細な。)それを、岡住、康頼自身の考えに従つて適宜取捨し、必要と考える箇所のみを、かゝげたのであろうと思ふ。

では、右二書の拠つた書とは、どんなものであろうか。ここで康頼本草について考察を進め、「新撰字鏡」との關係に及んでみたいと思ふ。

### 三

結論的に言えば、「康頼本草」の拠つた書とは、恐らく「神農本草經」であつて、後世、薬種について増補のあつた所謂「補入薬種」は、殆んど掲げないところを見ると、恐らく二次的資料として扱ふにすぎなかつたためであらう。以下この推論について、理

由をあげると、  
 (4) 康頼本草の本文中に「神農本草經」所引の書き入れが数ヶ所見え  
 る。

○「右神農本草經」とあるもの。

(437上、438上、451上下、452上下、453上……) 18例

○「右三十二種神農本草經」とあるもの。

(439下) 1例

○「右十四種神農本草經」とあるもの。

(441下) 1例

○「右三十一種神農本草經」とあるもの。

(442下) 1例

右の書き入れは、編者康頼が、薬種記載の際、その典拠を明示したものと考えられ、且、その書き入れが、本文全体にわたっていることは、「神農本草經」を第一の典拠としたことがうかがえる。

(4) 「康頼本草」について、その薬種の分類を眺めると、  
 草部 (上品之上、上品之下、中品之上、中品之下、下品之上、下品之下)  
 木部 (上品之上、下品之集)  
 菓部 (上品、中品、下品)  
 菜部 (上品、中品、下品)  
 人部 (品目なし)  
 禽部 (上品、中品、下品)  
 蟲魚部 (上品、中品、下品)

とあつて、大体において、上中下という三品による品目の立て方を採つていて、これは、「神農本草經」の「上薬、中薬、下薬」の三種の分類方法に酷似しているのである。よつてその品目の立て方

からも「神農本草經」の体裁を踏襲していると考えてよいであらう。

丹波康頼が、「医心方」撰述の際、卷一において、「諸薬和名第十」として掲げた「本草内薬八百五十種」、「本草外薬七十種」は、明らかに、本草和名の体裁を範としたものであつて、康頼としては、本草編纂にあつて、その典拠として、神農本草經を選び、それも、

「論曰。凡薬皆須探之有時日。陰乾暴乾則有氣力、若不依時探之則與草不別、徒藥功用終無益也。学當當及時採探以供所用耳。」  
 (康頼本草、455上、○印筆者。)

という態度で撰録した如くである。すなわち、本草和名の不便さを実感した康頼としては、成るべくして成つた書と言えるのである。

次に、二次的資料と考えられるものについてみるに、これ等は、「康頼本草」の薬種の注記の中に散見する。が、それも簡単な注記で、参考程度のものであつて、例えは、

○王瓜 味苦寒无毒 (中略) 圖經曰花黃謂之。(439下10)

○狼把草 秋穗子 (中略) 論曰之采用日本之。(442下3)

○甘露藤 味甘温无毒 (中略) 見陳藏器并日華子 (450上13)

○麤脂 味辛温无毒 (中略) 禹錫云論見之。(459上17)

等がそれである(傍線筆者)。「図經」は、「図經本草」(宋、蘇頌)、「陳藏器」は、「本草拾遺」(宋、陳藏器)、「禹錫」は、「嘉裕補注神農本草」(宋、掌禹錫)、「論」は、「脚氣論」等の

書をさすものであろう。

以上の(何)の三つの理由から、「康頼本草」が、その典拠を、「神農本草經」に置いたことは間違いないと思うのである。尚、川瀬博士によると、康頼の典拠とせる「神農本草經」は、安政元年に、森立之が校刊せる一本があり、依拠すべき本文であるが、これは狩谷檢齋が校勘しておいた草稿本を、己が名義によって刊行したものであるといわれる。

そこで、「新撰字鏡」の依拠した書について問題になるが、これは、新撰字鏡、康頼本草、神農本草經三書の記載事項を詳細に比較検討することによって明らかになると思われる。

四

こゝで問題になるのは、神農本草經のテキストとして何を選ぶべきかであろう。原本が佚した今日、その原初の形態をうかがうことは、望むべくもないが、幸いその原初への復原作業は、明の戚復、清の孫星衍、孫馮翼、日本の森立之等によつて試みられているので、それ等を資料にすることが一応可能といえる。自分としては、中でも定評のある森立之のテキストを遠ぶつつもりでいたが、それが叶わず、やむを得ず孫星衍、孫馮翼二人によつて編輯された「神農本草經」をテキストにあてたいと思う。本書は、嘉慶四年(1799)の成立で、「經史證類備急本草」に依拠し、その薬種品目については問題もあるが、注文に関しては、さして問題もないと考えられるので、これによつた次第である。

そこで三書(①神農本草經、②新撰字鏡、③康頼本草)の注記を

順にいくつかあげることによって検討を加えてみることにする。

④秦椒

(何)秦菜 味辛温主風邪氣温中除寒(中略)生川谷、名醫曰、生太

(何)秦椒 山及秦露上或琅邪、八月九月采實(一、卷二81)

(何)秦椒 八九月採實陰干伊太知波自可弥、又加波自加美。(卷七、15ウ)

(何)秦椒 味辛温、寒无毒和加波々之加美(449上9)

⑤榆皮

(何)榆皮 味辛平、主大小便不通(中略)生山谷、名醫曰生霸川三

月采皮取白、暴乾八月采實。(一、卷一、40)

(何)榆皮 二月採白波曝干八月採實陰干也。(卷七、15ウ)

(何)榆皮 味甘平无毒(中略)二月皮白暴干、八月採實、妊娠臨月

日服產極易墮下兒身皆塗之信其驗。(445下12)

⑥羊躑躅

(何)羊躑躅 味辛温、主賊風在皮膚中(中略)生川谷、吳普曰、羊

躑躅花(中略)諸邪氣、名醫曰(中略)三月采花陰乾。

(二、卷三109)

(何)羊躑躅花 三月採花、陰干。(卷七、16オ)

(何)羊躑躅 味辛温有大毒(中略)三月採花陰干、(中略)花色如

紅色、生深山、生平地號蘭芋。(442、下2)

(○×印筆者)

用例を全部あげるとは、煩雑になるので、教例をあげるとどめだが、右の如き記載形式から次のようなことが看取される。即ち、

I 新撰字鏡、康頼本草前書共、神農本草經をそのまゝ全部転載することはしていない。そこには、取捨選択が見られる。

II 新撰字鏡の抽出方法は、「採薬時節」の部分先ずか、次に「陰干」（右例文中○印）の二字を附加するのを原則としている。

III 一方、康頼本草は、初めに、「薬の性味」を抽出する。そして次に、「毒性の有無」を添加した後に、「採薬時節」をかゝげる。更に、必要と認められた場合は、康頼個人の「注記」（右例文中×印）を行なうこともある。

IV 新撰字鏡、康頼本草前書に共通なる「採薬時節」の記事は、「神農本草經」においては、「名醫曰」の項目の中に見られるものであつて、この「名醫曰」は、神農本草經においては、後世の「名醫」が必要と認めた場合に、新たに添加せるものであつて、「神農本草經」原初より記載されていた注文ではない。これに反して、康頼本草が抽出した「薬の性味」（「味辛温」、「味甘平」等）の記事は、神農本草經本来のものであつて、その事情に適じた康頼の見識がうかゞえるのである。

V、Ⅲでも一言した如く、康頼本草は、神農本草經に拠つたことを明記しながら、康頼自身の注記も多い。これは、新撰字鏡の編者、昌住が、単なる学僧であつたに對して、康頼が、別に、「医心方」をも撰進し得た鍼博士であつた点に帰因するものであろう。

## 五

扱、新撰字鏡の本草部を注意して見ると、「採薬時節」を掲げな

い一群の標字が目につく。即ち、

龍眼佐加木 烏草樹左美 鷄冠樹加戸天 寶子木和知佐

折傷木伊比云未述 黄楊野介丸木 (下略) (卷七、16才)

等であつて、これ等は、和訓のみの注記形式である。念の爲、右の事例の中「龍眼」を例にとつてこれが、神農本草經、康頼本草において、どうなつてゐるかを調べると、

(イ) 龍眼 味甘平、主五藏邪氣（中略）生山谷。吳普曰。龍眼一名益智要術一名比目。名醫曰。其大者似拉御。生南海松樹上五月采陰乾。（「神農本草經」、一、卷二83）

(ロ) 龍眼 味甘平无毒（中略）似檳榔子、又葉荔枝相似一名益智、時採之。（「康頼本草」447下4）

の如く、その記載形式は、明らかに前記のと同様であつて、このことより、本草木異名、本草々異名の後半は、採薬時節を一々記さず、只、和訓を略記するを以つて満足としたためで、その点、昌住の記載方式に不統一なるところがみえる証拠となるであらう。

只、こゝで一つ疑問が生ずるのは、昌住の稿成つた時においては、採薬時節についても統一的に記載されていたが、後世、書写の際、後半の部分のみ、「採薬時節」については一々記さず、只、和訓のみを注記したのではないかということである。しかしこの疑点は、次の諸点より氷解されると考えられる。

I 和訓のみの注記ある標字は、後半に一括して出されているが、「本草鳥名」のみは、和訓注記で終始している。（各々10例程度であつて、殊更、この部分だけ略記したと考えるより、むしろ、草稿本の時より和訓のみの注記であらう。

『新撰字鏡の「享和本」は、「採葉時節」等の記事をことごとく省略して、和訓のみをあげているにすぎないが、これは、抄録者の私意による改編であつて、原本の後半が、和訓のみの注記であつた爲に、この連想より、他の標字についても、和訓のみで統一しようとしたと考えられる。よつて、享和本の表記体裁は、原本自身が不統一なる表記であつた事実を暗に証明するのではないだらうか。

#### ■新撰字鏡の次の例、

○巻栢又求般又可歲又約豆又白糖（天治本、巻七、16オ）  
○巻栢久弥亦云求般又云可歲又云約豆又白糖（享和本、52オ）  
を比較して見るに、天治本は、本草和名が、「一名——」として標字の種類を違へて行く方式に酷似し、享和本は、一つの標字に固定して、和訓をかゝげ、天治本の「又——」以下の記号は、和訓の次に、副次的に注記するにすぎない。こうした新撰字鏡の諸本の標字の記載方式のちがひも、一方では、注文についての本来的な不統一性を傍証するものではなからうか。

以上のことより、新撰字鏡は、神農本草經を典拠としながら、その注文は不統一であつて、本草家の爲には、満足すべくもなく、それが一学僧たる昌住の編であることよりして、一通りのその前の知識を得る爲の便利な参考書としての価値は認むべきであらう。

但し、表記形式が、辞書である「本草和名」よりもむしろ「康頼本草」のそれに酷似していることは、（但し「巻栢又求般又可歲」の如き例外は既述の如くである。）新撰字鏡が単なる辞書としてよりもむしろ「実用的専門書」としての面をも不十分ながらもつてい

ると言つてよいであらう。

## 六

次に、新撰字鏡「本草部」の構成について考察してみよう。こゝで問題にするのは、本草部の標字の配列が、本草書で言う規範的な配列、（部類、品目による系統的配列）に従っているかどうかである。それには、次の三書の部類、品目を調べ、これ等と新撰字鏡とを比較対応させることによつて、その配列の状態を観察することが一番良いと思ふ。三書というのは、

(イ)前掲「經史證類備急本草」中の「神農本草經」を抽出せるもの。

(以下「證類本草中の神農本草經」と略記す。数字は、抽出著森原三氏による通し番号)

(ロ)本草和名（古典全集本）

「新修本草」によつてゐる爲、その系統のものとしてこの一本をえらぶ。

(ハ)康頼本草（群書類従本）

「神農本草經」を母体としてゐるのでこれをえらぶ。

であつて、以上の如く、本国の書を主に選んだのは、「新撰字鏡」との系列を考察するためであり、一方、神農本草經の品目における「草部」「木部」の混入の事実を考察し、原本が「草木部」という一品目であつたことを、かつて立証した森立之の見解をうかがうためである。

そこで、新撰字鏡及び前記(イ)(ロ)三書の部類、品目別の比較対照表をかゝげると次の如くなる。

○本草木異名

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	新撰字鏡 (i) 證類本草 の神農本草經
甘遂	蜀樹	曼樹	合微樹	支子	黄蘗	厚朴	枳實	桔梗	黄芩	女貞實	著實	松實	槐實	榆皮	棗樹	(ii) 本草和名
183	250	265	248		222	238	237	173	137	229	77		216	220	240	(iii) 康頼本草
(草下上)	(木下)	(木下)	(木中)		(木上)	(木中)	(木中)	(草下上)	(草中上)	(木上)	(草上上)		(木上)	(木上)	(木中)	
上38ウ(草下)	下1ウ(木下)	下2オ(木下)	上57オ(木中)	上57オ(木中)	上54オ(木上)	上55ウ(木中)	上56ウ(木中)	上38オ(草下)	上26オ(草中)	上52ウ(木上)	上17オ(草上)	上51ウ(木上)	上54ウ(木上)	上54オ(木上)	上57ウ(木中)	
442上10(草下上)	448上13(木下)	450上7(木下)	448上6(木上上)	447上1(木上上)	446上2(木上上)	447上7(木上上)	441上7(草下上)	439上3(草中上)	446上12(木上上)	436下16(草上上)			445下7(木上上)	445下12(木上上)	447上9(木上上)	

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
白樹	辛夷	卷栢	木辛夷	黄楊	折傷木	賣子木	鴉冠樹	烏草樹	龍眼	巴戟天	練實	蘭茄	石南草	蜀漆	恒山	羊躑躅花	莽草
	226	84							245	71	253	204	259	182	181	194	255
	(木上)	(草上上)							(木中)	(草上上)	(木下)	(草下下)	(木下)	(草下上)	(草下上)	(草下上)	(木下)
	上54オ(木上)	上16オ(草上)			上58ウ(木中)	下4ウ(木下)	下54オ(本草外藥)		上55ウ(木中)	上18ウ(草上)	下3ウ(木下)	上44オ(草下)	下1オ(木下)	上42オ(草下)	上42ウ(草下)	上41オ(草下)	下1ウ(木下)
	446上8(木上上)	437上1(草上上)		450上17(木下)	448上9(木上上)	450上11(木下)		447下4(木上上)	436下13(草上上)	448下3(木下)	443下9(草下下)	449下8(木下)	442上8(草下上)	442上9(草下上)	442下2(草下上)	448下6(木下)	

○本草々名

49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	
天門冬	牡桂	景天	宛蔚	地蘆	獨活	牛膝	石龍荖	石龍	黄精	新撰字鏡
50	213	109	56	108	61	55	115	139		(イ)證類本草中 の神農本草經
(草上上)	(木上)	(草上下)	(草上上)	(草上下)	(草上上)	(草上上)	(草上下)	(草中上)	上13オ(草上)	(ロ)本草和名
上12オ(草上)	上52オ(木上)	上21オ(草上)	上17ウ(草上)	上19オ(草上)	上16オ(草上)	上16オ(草上)	上20オ(草上)	上28ウ(草中)	436上1(草上上)	(ハ)康頼本草
436上5(草上上)	445下4(木上上)	438上1(草上下)	436下6(草上上)	437下16(草上下)	436上13(草上上)	436上10(草上上)	438上6(草上下)	439上5(草中上)		

39	38	37	36	35
杜舟	愿實	菡芋	占斯	甘橘
158		190		
(草中下)		(草上下)	下51オ(有首無用)	下32ウ(菓)
上32ウ(草中)	上30オ(草中)	上41オ(草下)		
440上8(草中下)	439下9(草中下)	442上16(草上下)		

67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50
地膚子	車前子	意苳子	菴蓐子	枸杞	漏卮	牡荊實	辛夷	細辛	杜仲	龍胆	石斛	人參	菊花	暑預	遠志	白朮	麥門冬
108	62	65	75	217	97	225	226	69	228	68	70	49	48	64	67	53	60
(草上下)	(草上上)	(草上上)	(草上上)	(木上)	(草上下)	(木上)	(木上)	(草上上)	(木上)	(草上上)	(草上上)	(草上上)	(草上上)	(草上上)	(草上上)	(草上上)	(草上上)
上19オ(草上)	上17ウ(草上)	上17オ(草上)	上17オ(草上)	上54ウ(木上)	上24オ(草上)	上52ウ(木上)	上54オ(木上)	上16オ(草上)	上52オ(木上)	上18オ(草上)	上15ウ(草上)	上15ウ(草上)	上14ウ(草上)	上14ウ(草上)	上14オ(草上)	上12オ(草上)	上12オ(草上)
437下16(草上下)	436下1(草上上)	436下3(草上上)	436下12(草上上)	445下8(木上上)	437下4(草上下)	446上6(木上上)	446上8(木上上)	436下10(草上上)	446上10(木上上)	437上2(草上上)	436下11(草上上)	436上4(草上上)	436上3(草上上)	436下5(草上上)	436下9(草上上)	436上8(草上上)	436上12(草上上)

85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68
玄參	貝母	種	大青	藜蘆	干薑	夕菜	黃耆	當歸	忍冬	荷陳蒿	白英	青蘘	藍實	狼薈子	王不留行	蒺藜子	菟絲子
130	134	133		147	119	127	91	124		110	72	344	85	174	118	90	54
(草中上)	(草中上)	(草中上)		(草中上)	(草中上)	(草中上)	(草上下)	(草中上)		(草上下)	(草上上)	(米穀上)	(草上下)	(草下上)	(草上下)	(草上下)	(草上上)
上28才(草中)	上27ウ(草中)	上27才(草中)	上27ウ(草中)	上26ウ(草中)	上26ウ(草中)	上26才(草中)	上23才(草上)	上25ウ(草中)	上19才(草上)	上24才(草上)	上18ウ(草上)	下41ウ(米穀)	上21才(草上)	上42才(草下)	上21才(草上)	上19ウ(草上)	上81才(草上)
438下13(草中上)	438下17(草中上)	438下16(草中上)	439下5(草中上)	439上14(草中上)	438下2(草中上)	438下10(草中上)	437上14(草上下)	438下1(草中上)	438上12(草上下)	438上2(草上下)	437上4(草上上)	452上1(米穀上)	437下5(草上下)	441下14(草下上)	438上8(草上下)	437上13(草上下)	436上9(草上上)

103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86
澤漆	大戟	葶藶子	石長生	連翹	酸醬	白合	梟實	白薇	紫苑	白芒	瞿麥	通草	石葦	拔筭	狗脊	統斷	苦參
189	188	172	208	203	145	132	120	150	141	135	129	126	148		138	96	123
(草下上)	(草下上)	(草下上)	(草下下)	(草下下)	(草中上)	(草中上)	(草中上)	(草中上)	(草中上)	(草中上)	(草中上)	(草中上)	(草中上)		(草中上)	(草上下)	(草中上)
上39才(草下)	上39ウ(草下)	上38ウ(草下)	上46才(草下)	上43ウ(草下)	上31ウ(草中)	上31ウ(草中)	上31才(草中)	上30ウ(草中)	上30ウ(草中)	上30才(草中)	上29ウ(草中)	上29ウ(草中)	上28ウ(草中)	上29才(草中)	上29才(草中)	上22ウ(草上)	上28才(草中)
442上15(草下上)	442上14(草下上)	441下12(草下上)	444下9(草下下)	443下6(草下下)	439上12(草中上)	438下15(草中上)	438下4(草中上)	439下3(草中上)	439上7(草中上)	454下12(菜下?)	438下12(草中上)	438下9(草中上)	439下15(草中上)	439下4(草中上)	439上4(草中上)	437下3(草上下)	438下7(草中上)

121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104
殷薜子	聡明草	百部根	葭薹	席杖根	庸掌	羊蹄	羊蹄	白頭公	白薺	母泉	木防已	欬東花	射干	附子	烏喙	天雄	旋復花
28					169	136	196	199	184		156	157	179	165	166	167	176
(玉石中)					(草下上)	(草中上)	(草下下)	(草下下)	(草下上)		(草中下)	(草中下)	(草下上)	(草下上)	(草下上)	(草下上)	(草下上)
上6才(玉石中)		上34才(草中)	下39才(菜)	上46才(草下)	上42才(草下)	上32才(草中)	上44ウ(草下)	上44才(草下)	上43才(草下)		上33才(草中)	上32ウ(草中)	上41才(草下)	上40ウ(草下)	上40ウ(草下)	上40ウ(草下)	上39ウ(草下)
455下17(玉石上)		440上4(草中下)	454下11(菜下?)	447下7(木上上)	441下10(草下上)	439上2(草中上)	443上2(草下下)	443上8(草下下)	442上11(草下上)		439下15(草中下)	440上6(草中下)	442上6(草下上)	441下5(草下上)		441下7(草下上)	442上2(草下上)

129	128	127	126	125	124	123	122
薨	石英	金可	白礬石	陽起石	禹餘糧	孔公薜子	土陰薜子
			36	26	12	27	
?			(玉石下)	(玉石中)	(玉石上)	(玉石中)	
		上10才(玉石下)	上8ウ(玉石下)	上6ウ(玉石上)	上5才(玉石上)	上6ウ(玉石中)	上9才(玉石下)
		457上12(玉石下)	456下12(玉石下)	456上4(玉石上)		456上1(玉石上)	457上2(玉石下)

○本草鳥名

136	135	134	133	132	131	130
晨風鳥	鴉子鳥	護因鳥	伯勞	喙木	木毚	胡蘆子
			下54ウ(草外藥)	下54才(本草外藥)		下11ウ(獸禽?)
			460下9(禽下)	460上9(禽下)		

〔新撰字鏡〕  
 (一)證類本草中  
 の補農本草經

(二)本草和名

(三)康賴本草

139	138	137
鵞 翻	鵞	郭公鳥

右の表は、新撰字鏡「本草部」の各標字について、初めから通し番号(1)~(139)にして、(即ち、その番号は、本草部所収の標字の配列順序をいみしていることになる。)それに各々対応する前記の「證類本草」中の神農本草經、(1)本草和名、(2)康賴本草の部類、品目を注記したものであって、右の表の各欄中、( )内がその部類、品目であり、( )の上の注記は、各依拠本の所在をあらわす。

この作業を成すにあたって留意した点は、  
 ③標字についての比較より、部類、品目についての比較検討を目的としているので、右(1)(2)(3)の各標字相互の異同については、記さなかつた。例えば

- (1)黄葉↓薛木 (10)恒山↓常山  
 (7)白合↓百合 (133)伯勞↓百勞  
 の如きがそれである。

④新撰字鏡に通し番号をつける際、例えば、

⑤卷栢又求般又可藏又約豆又白糖

においては、「又——」以下は無視して、「卷栢」で代表させた。等である。

七

さて、右の表を觀察して見ると、次のようなことが言えそうである。

I 新撰字鏡は、神農本草經の標字を主に採録しているが、その外、後人増補と考えられるもの(例えば、「陶隱居本草」、「蘇敬注本草」)をも採録している。右表中(1)の空欄がそれである。通し番号で言うと、(4)(10)……(111)(117)等がそれに該当する。「本草鳥名」の如きは、全然そうである点注目すべきであろう。

II 新撰字鏡の本草々部、木部の各部類所収の標字は、他の(1)(2)(3)の書のとそれと比較対照した結果混入がみられる。

(1)本草木部に混入せるもの

(草 類) (5)(7)(8)(10)(13)(19)(20)(24)(27)(30)

(本草外葉類) (27) 1例

(菓 類) (36) (37) 1例

(有名無用類) (36) (37) 1例

(2)本草々部に混入せるもの

(木 類) (59)(60)(61)(63)

(米 穀 類) (73) 4例

(菜 類) (118) (73) 1例

(玉 石 類) (121)(122)(123)(124)(125)(126)(127)(128) 8例

右の如く、その混入が、草木類相互の混入にとどまらず、葉菜、米穀、果ては、有名無用、本草外葉、玉石の諸類に迄及んでいることは、昌住の本草学に対する無知もあつたにしろ粗雑だと言えると思

う。しかし全体的に眺めて、一応部類毎に配分することを考慮している点、本草書の配列法にそのまゝ拠っていることは、明らかである。

Ⅲ混入例の中、草部における玉石類の混入は、注目すべきである。これ等は、草部の末尾に一群をなして、明らかに玉石類としてここに配置したものである。草、木、果、菜、米穀の各部類相互の混入の蓋然性はあり得ても、玉石と草類とを混入することは普通、あり得ないと考えられるので、こゝは、意識的、便宜的に「玉石類」を注記なしに、「本草各部」の末尾に補入せるものだと考えるのが妥当ではないであろうか。

Ⅳ新撰字鏡と比較した他の三書(イ)「證類本草」中の神農本草經、(ロ)本草和名、(ハ)康頼本草の部類、品目の相互関係は、大体において一致していて、妥当な分類がなされているが、部分的に少しは乱れがある。

⑧部類の乱れ

- (93) (イ)草 ↓ (ロ)菜 (117) (ロ)草 ↓ (ハ)木

- (132) (ロ)本草外薬 ↓ (ハ)禽
- (133) ⑤品目の乱れ

- ⑥(ロ)木中 ↓ (ハ)木上上
- (1) (ロ) (10) (10) (10) (イ)木中 ↓ (ハ)木上上

右において、(イ) (ロ) に対する (ハ) の対応は注意すべきで、(イ) つまり、「康頼本草」の用いた「神農本草經」の部類立ては、(イ) (ロ) とは、系統的にやゝことなるものであろうか？

Ⅴ、前掲書「(イ)證類本草」所収の「神農本草經」の各巻における部

類、品目の項に、新撰字鏡の各標字がいかに対応配分されるかをみると次のこととなる。

巻部品	(イ)													
	玉石中	玉石上	玉石下	草上	草中	草下	草上	草中	草下	草上	草中	草下	草上	草中
124 (10)	121 (10)	126 (10)	5 (77)	7 (137)	39 (158)	7 (137)	42 (115)	5 (77)	126 (10)	121 (10)	124 (10)	5 (77)	7 (137)	39 (158)
123 (10)	123 (10)	123 (10)	24 (71)	41 (139)	109 (157)	41 (139)	45 (108)	24 (71)	123 (10)	123 (10)	123 (10)	24 (71)	41 (139)	109 (157)
125 (10)	125 (10)	125 (10)	32 (84)	77 (104)	110 (156)	77 (104)	47 (109)	32 (84)	125 (10)	125 (10)	125 (10)	32 (84)	77 (104)	110 (156)
⑤	⑤	⑤	43 (55)	.....	.....	.....	.....	43 (55)	⑤	⑤	⑤	43 (55)	.....	.....
⑤	⑤	⑤	44 (61)	87 (96)	116 (169)	87 (96)	44 (61)	44 (61)	⑤	⑤	⑤	44 (61)	87 (96)	116 (169)
⑤	⑤	⑤	46 (56)	.....	.....	.....	46 (56)	46 (56)	⑤	⑤	⑤	46 (56)	.....	.....
⑤	⑤	⑤	49 (60)	.....	.....	.....	49 (60)	49 (60)	⑤	⑤	⑤	49 (60)	.....	.....
⑤	⑤	⑤	74 (72)	.....	.....	.....	74 (72)	74 (72)	⑤	⑤	⑤	74 (72)	.....	.....
1	3	1	21	11	3	21	11	21	1	3	1	21	11	3

右の表よりわかることは、

Ⅴの②

新撰字鏡の本草部の標字は、玉石、草、木、米穀の四部類において、「證類本草」中の「神農本草經」と共通しているが、その下位分類たる「品目」においても、上中下三品のいづれにもわたつて採録されて、同一品目のみより抽出するという偏向はみられない。只、米穀部は、上品のみであるが、草木部ではない上、事例が稀少であり（一例）、例外と見てさしつかえないと思う。

## Vの⑥

しかし、右部類について、その品目毎の事例を見るに、いづれも「上品」（本草学でいう「身体に益するもの」）より比較的多く採録されている。中でも、草部においては、品目の下位分類、即ち、「上品之上」、「中品之上」、「下品之上」においても「上」より多数採録されている。只、「玉石部」のみがそうではなく、中品に於て数が上まわるが、これも、新撰字鏡においては、草、木部の如く独立した部類ではなく、既述した如く、草部の末尾に補入されたものであると考えられるので、そこ迄注意のゆきとゞかなかつた為の結果だと考えられる。

## Vの⑦

かくして、部類、品目毎に多少の採録数はことなるが、新撰字鏡の本草木部、草部の配列は、何の注記も施しては無いにしても、一応、大まかに見て

木部 上品、中品、下品  
草部 上品之上、上品之下  
      中品之上、中品之下  
      下品之上、下品之下

の如き次第に配列されていて、本草書の面目を保っていることが判明するのである。

Ⅵ適し番号<sup>(130)</sup>(139)は、本草鳥部に入るべきものであるが、「神農本草經」より採録せるものは一つも見当らない。更に「本草和名」、「康頼本草」とも共通するものが<sup>(132)</sup>(133)の二例にすぎず、草部、木部とは趣きをことにする。畷住は、「本草鳥部」として独立した部類を立てず、「鳥類第七十五」の末尾に、「本草鳥名」と注記するにとゞめた点から見ても、補足的色彩の濃厚なものであり、本草書からの採録というより別系統の資料（例えば、弁色立成、楊氏漢語抄等の通俗文字字書）からの補入とする貞苜伊徳氏の考えをうらがきするものであろう。

## 八

以上、新撰字鏡の本草部について、その記載形式と構成をながめたのであるが、こゝに要約すると、

Ⅰ新撰字鏡は、本草部において、神農本草經をその典拠としているが、その注文については、和訓だけではなく採薬時節等についても摘記しているなど、単なる辞書としてより実用的専門的な書としての面も不十分ながら有していると考えられる。

Ⅱ新撰字鏡「本草部」の配列は、一見何の注記もなく、乱雑に次第したようであるが、実は、部類、品目ごとに正しい構成がなされていて、一応本草部としての面目を保っている。となるであろう。

- 1 阪倉篤義氏「辞書と分類」(国語国文一九ノ二)
- 2 川瀬一馬氏「古辞書の研究」一七四頁
- 3 森鹿三氏「神農本草經所載薬品について」(京大人文科学研究  
所創立25周年記念論文集)所収)
- 4 本稿では、「叢書集成」初篇(商務印書館発行)に拠った。
- 5 註3に同じ。

受贈雑誌

昭和39年1月～5月

(その二)

国文学 解釈と教材の研究	1～5月	萬葉	50～15	女子大国文(京都女子大学)	31～32
国文学 解釈と鑑賞	1～5月	中世文芸	28	語文(日本大学)	16～17
国語国文	1～4月	近世文芸稿	9	古典論叢(日本大学)	9
国語と国文学	1～5月	田唄研究	6	成城文芸	34～35
文献ジャーナル	1～4月	和歌文学研究	16	香椎瀧(福岡女子大学)	9
日本文学(日本文学協会)	1～2月	連歌俳諧研究	26	文芸と思想(福岡女子大学)	26
文学	1～5月	文学・語学	31	国文(お茶の水女子大学)	20
学苑(昭和女子大学)	1～5月	りてらえ やばにかえ	6	文芸と批評	2
白路	1～5月	ぐんしよ	2	華(日本女性文学会誌)	3
ひのくに	1～4月	能楽思潮	27～28	実践文学(実践女子大学)	20～21
八雲	1～4月	文学研究(九州大学)	62	日本文学研究(大東文化大学)	3
日米フォーラム	1～5月	文学論叢(九州大学教養部)	11	国文学(関西大学)	35
国学院雑誌	1～3月	文学論叢(東洋大学)	26	漢文学研究(早稲田大学)	11
国語研究(国学院大学)	112～115	文化(東北大学)	27卷4	国文学研究(早稲田大学)	29
音声学会会報	17	文芸研究(東北大学)	44～45	国語の研究(早稲田高校)	2

6 昭和36年11月12日、国語学会(福岡)における御発表。  
附記

本稿は、私の大学院修士論文の一部をなすものである。本稿を草するにあたっては、福岡良輔先生、春日和男先生には御懇切なる御指導を賜わり、又、畏友山口康子氏にも色々御助言をいただいた。記して謝意にかえさせていたゞきます。